

高齢者のめまいと難聴

国立長寿医療研究センター耳鼻咽喉科は、2010年4月1日より常勤医師が2名となりました。救急や予約外の患者様への対応が以前より速やかに行えるようになり、耳鼻咽喉科領域の高齢者医療の充実を図っています。当科を初診される患者様の主訴として最も多いのはめまいと難聴です。のどの痛みや違和感、耳鳴、鼻閉、鼻汁といった他の症状よりも倍近く、めまいと難聴は全体の4分の1を占めています。今回は、この2症状についての当科における取り組みをご紹介します。



杉浦彩子
耳鼻咽喉科医師

1. 高齢者のめまい

めまいは日常で最も多くの方が体験する病状の一つです。60歳以上では程度はさまざまながら、約30%の人が日常的にめまい、ふらつきを感ずると言われています。高齢者のめまいやふらつきの原因は、中枢前庭や小脳の処理能力の衰え、三半規管・卵形嚢・球形嚢の感度低下、眼球運動制御機能の低下、筋固有知覚の低下、筋力低下など多岐にわたり、経過の長いことも多く、診断・治療に難渋することがしばしばです。

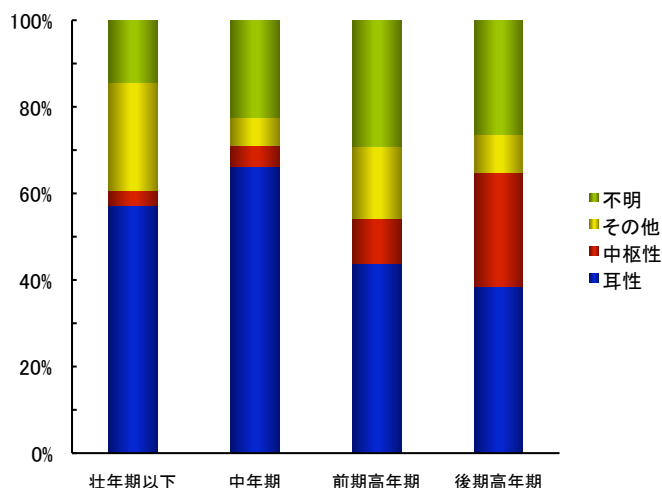


図1 めまいの原因

めまいの原因について、2006年9月から2007年8月までの1年間にめまいを主訴として当科を初診された患者様192名を壮年期（44歳以下）、中年期（45-64歳）、前期高年期（65-74歳）、後期高年期（75歳以上）にわけて検討してみました（図1）。どの年代でも耳性めまいが最も多く、その過半数は良性発作性頭位性眩暈症（BPPV）でした。BPPVは内耳にある耳石器の耳石が三つのループを持つ三半規管のどこかへと脱落して起こると考えられています。三半規管のどの部位が責任病巣か診断し、それに基づいて理学療法を行うのが効果的です。当科ではEpley法などの耳石置換療法を行っていますが、高齢者では気分不良になる方がみえるため、ご自分で行える簡便なりハビリの指導も行っています。その他の耳性めまいとしてはメニエール病、突発性難聴、遅発性内リンパ水腫など聴力の異常も伴うめまいがあります。高齢になるほど中枢性めまいが増え後期高年期では28%を占め、また、多発性小脳梗

塞にBPPVの併発を疑うような症例や耳性めまいに起立性低血圧を伴う症例など、めまいの原因が複数にまたがる症例も認めました。

当院ではめまいを主訴とする患者様は基本的に神経内科と当科でダブルチェックしており、経過中に症状の変化がみられた場合なども積極的に神経内科と連携をとっています。めまいのある患者様の1割程度の方が、めまい症状が起こったときに転倒されます。転倒された後期高齢者の11名のうち2名が骨折を起こしていました。また、めまい患者の4分の1は入院加療を要しました。急性期は転倒に留意する必要がある、めまい症状が改善してきた時には体を十分に動かすよう、個々の症例に応じて具体的に指導するように心がけています。

2. 高齢者の難聴

当科初診患者様で難聴を主訴として来院した145名の良聴耳の4分法平均聴力レベル（正常、軽度、中等度、高度、聾に分類）を年代別にお示しします（図2）。高齢になるほど難聴の程度が高度化することがわかります。また、高齢者では、慢性かつ両側性のことが多いことがわかりました。

一方、どの年代にも一定数で突発性難聴など急性期の治療が必要な疾患があります。このような急性期疾患では、高齢者であっても治療により聴力の改善が見込めます。しかし、若年者に比べて発症してから受診するまで様子を見る期間が長いことため治療が遅れる傾向にあることがわかりました。

良聴耳の平均聴力レベルが40dBを超えると中等度難聴ということになり、話声の聴取が困難になってき始めます。そして一般に4分法平均聴力レベル70dB以上では聴覚の身体障害に該当となります。本邦における疫学調査では中等度難聴の頻度は60代では男性4.3%、女性1.4%であるのに対し、70代では男性24.9%、女性11.3%と急増しており、当科の受診患者様の傾向とも一致しています。加齢による感音難聴に耳垢・耳管機能異常などを伴う症例も高齢者には特に多く、耳垢の除去や鼓膜切開・穿刺・通気などの処置後は聞き返しが減ることもあります。

3. 補聴器外来

当科では補聴器適合判定医及び補聴器相談医の資格を有する2名で補聴器外来を行っています。理研産業に協力いただき、箱型・耳掛型・耳穴型といった補聴器を実際にその場でも何台か試聴し、患者様の聴力及びニーズにあった補聴器を2週間ほど貸し出しています。ハウリング防止やノイズキャンセル、指向性などの機能は年々向上していますが、人間の聴覚には及ぶべくもなく、あまりに補聴器への期待が高すぎると、落胆しそのまま不使用となってしまう方も少なくありません。

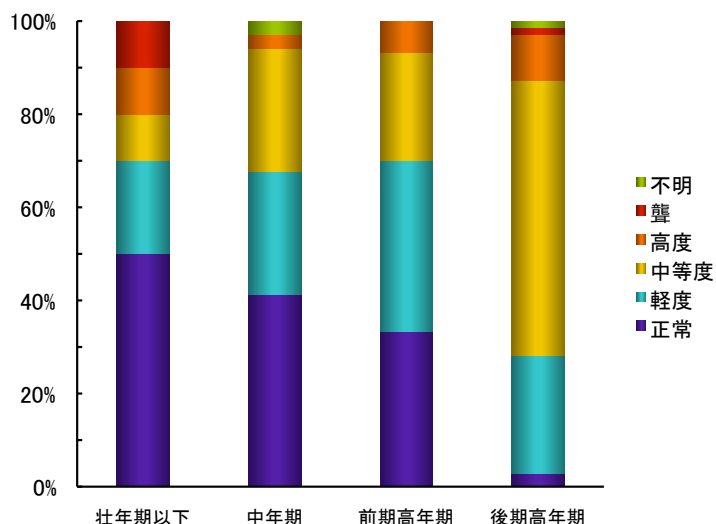


図2 良聴耳の4分法平均聴力レベル

これまでに500名以上の患者様に補聴器のフィッティングを行ってきましたが、補聴器適合検査を丹念に行い、できる限り最適にフィッティングすると同時に補聴器の機能の限界と有用性についても納得いくまで説明し、有効に補聴器を使用していただけるように努めています。高齢者では他人とのコミュニケーションの機会の減少に伴い、若年者に比して補聴器装用の意欲低下を認めますが、聴覚障害の存在は日常生活の活動度をさらに低下させてしまいます。

当補聴器外来の追跡調査では、装用を始めて1年後には耳垢によるつまりや耳栓の劣化や外耳道の変形によるハウリングなどの問題点がでてくる場合も多く、定期的なフォローを行うようにしています。

4. おわりに

めまいも難聴も加齢とともに頻度の増えていく症状であり、慢性になってしまうと根気よく付き合わねばならない部分もあります。しかしながら適切なりハビリで改善できる部分もありますので、お気軽にご相談ください。

長寿医療研究センター病院レター第27号をお届けいたします。

めまいは、高齢者では10人に一人くらいおきる不快な症状です。ふらつき程度で、少しすればよくなるものから、ぐるぐる地球が回って気持ち悪くなるものまで、症状の重さも、続く時間も様々です。めまいの多くは耳が原因であることがおおいですが、高齢者では、脳に原因がある場合も増えてきます。しっかりした検査で、確かな診断が、治療や生活指導に結びつきます。

心あたりのある方が気軽にご相談できるようお願いいたします。



院長 鳥羽研二